

世界戦後の地名考 (十三)

瀧川 規 一

アレキサンドリア(Alexandria)。アラビア語にてはイスカンデリア(Iskanderia)と呼ばれ、埃及に於ける第二の大都會である。また埃及の主要港である。紀元前三三二年にアレキサンダ大帝によつて創設され、海とマリウト湖(Lake Mariut) 又は一名マレオチス(Mareotis)湖との間にある狭き砂質の岬の上に都會が建設されて居る。土人の住居區は人工によつて作られた陸地に沿うて延びてゐるが、この人工的陸地は古代のヘプタスタヂアム(Hepstadium)と稱する陸橋の遺跡である。この陸橋は海岸とファロス(Pharos)の島とを結びつける爲めに希臘人によつて建造された七スタヂア即ち一、四〇〇ヤードの長さを有する陸橋であつた。

アレキサンダ大帝の後繼者たるプトレミ・ソ

ーテル(Ptolemy Soter) フィラデルフス(Philadelphus)及びエウアデテース(Euergetes)の治世の下に、この都會は藝術科學及び學問に於いて世界に於ける最も有名なる中心地となつた。昔は大圖書館があり、約七十萬のバピルス(papyrus)紙に書かれた卷物を藏してゐた。その他著名なる建築物としては博物館、セラピス(Serapis)の殿堂及び幾つも王宮があつたと云はれてゐる。然るに今日では全く消滅したつて只遺れるものはポムペイの柱(Pompey's Pillar)と稱せられるもの丈けである。これは紀元三〇二年にセラピアム(Serapeum)敷地の中心に建てられた航海者の爲めの目標である。クレオベートルの針(Cleopatra's Needle)と今日稱せられてゐる二つの方尖碑(obelisk)が市の東部に建

つてゐたのであるがその一は一八七八年倫敦に運ばれ一は一八八〇年に紐育に運ばれた。

アレキサンドリア市が偉大なる勢力を發揮した最初の時期に於ける知的先覺者中には數學を以て今日まで有名なるイユクリッド (Euclid) 及びその弟子の一人なるアーキミードス (Archimedes) が居り詩人にはシオクリタス (Theocritus) 及びカリマカス (Callimachus) が居つた。紀元前三〇年に起つた羅馬人の征服後にはネオ・プラトニズム派の哲學が起り、次の時期に於ては猶太人及びキリスト教信者の哲學者等の間に猛烈なる爭論が起つた。紀元六四〇年にはこの都會はマホメットの支配下に陥りそれ以後アレキサンドリアは衰微した。殊に一五一七年土其古人によつて占領されて以來衰微を極め十九世紀に於てメヘメット・アリ (Mehemet Ali) の治下になつて初めて繁榮を回復した。一七九八年にはこの都會はナポレオンによつて占領されたが一八〇一年には戰鬪五ヶ月の後に英軍に降伏

し、サ・ラルフ・アーバクロムビ (Sir Ralph Abercromby) に指揮された英軍はこれによつて佛軍の埃及進入を阻止した。アラビ・バシヤ (Arabi Pasha) が叛亂を起しその一味が市街を掠奪したので一八八二年英軍は市街を砲撃した。

今日にてはアレキサンドリアは埃及の最重要なる貿易中心地であり夏期の埃及政府の本部となつて居る。主要建築物は博物館市有宮殿兵營砲兵工廠である。一九二九年十一月に七〇、〇〇〇平方ヤードの面積を有するスタヂウムが公開された。人口五十七萬餘。

(筆者の都合によりこれにて擱筆)

新著紹介

○大塚地理學會論文集 第二輯(下) 大塚地理學會編

菊版二六三頁 東京古今書院發行 三月 定價二圓

本巻には左の重要な十二篇の論文が編輯されて居て當時の地理研究の傾向を明かにして居ると同時に地方の研究者に地理研究の方針方法を示して居て、眞に指導的啓發的の論文集といふことが出来る。(N)